

社会

社会とつながり、よりよい社会を創る子



社会科

社会とつながり、よりよい社会を創る子

岩田 裕輝

社会科は、社会的事象について「見えるもの（様子や事実）」の理解を土台にして、「見えな
いもの（特色や意味、価値）」を考える教科である。そのためには、社会的事象に対して児童が
自分事としてかかわり、人々の営みを通して考え、身に付けた社会科の見方や考え方を生かして、
社会的事象の意味や価値について多角的に考える学習が重要である。また、学びを通して
自己の考えの変容を自覚するとともに、そうした学びを肯定的に捉え、将来、社会に参画し、よ
りよい社会を創る子供を育成したい。

1. 社会科の研究テーマ

(1) 社会科の問題意識

中央教育審議会（第140回）配付資料（2024）において、「深刻さを増す少子化・高齢化、協調・競争と分断・対立により混迷の度を増すグローバル情勢、生成 AI などデジタル技術の発展といった大きな変化があいまって、社会や経済の先行きに対する不確実性がこれまでになく高まっている」（p1）ことが示された。これからの我が国を担う子供たちは、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けることの重要性が増している。しかし、本校の子供たちの様子を見てみると、社会のニュース等に目を向け、社会で何が起きているか知識をもっている子供が多いが、その背景や意味に目を向ける子は少ないように感じる。

本校社会科部では、上記の問題意識のもと、子供たちが身近な社会の「人・物」に主体的に関わり、実社会にあふれる膨大な情報の中から、よりよい社会を目指して選択・判断しながら、社会に参画する力の素地を養っていきたいと考える。そのために、まず実社会を多面的・多角的に見て、実社会の仕組みを知る必要がある。社会的事象を社会科の見方・考え方を働かせて読み取ったり、身近な「人・物」に出合ったりすることで、「～から素早く私たちの命が守られるのは、〇〇や△△が連携しているからだ。」「～は■や□という工夫によって、私たちのもに届いている。」など子供たちの中で様々な面で、立場で、実社会の出来事を説明できるようになると考える。このように、不確実性が増す社会について、子供がいかに現状を把握し、問題意識をもって実社会を問い直していくかが課題である。

(2) 社会科に求められていることは

文科省の第4期「教育振興基本計画」（p8）では、日本社会に根差したウェルビーイングの向上が目指されるなど、今後も多様な個人や社会が幸せや豊かさを感じられるよう、教育を通じたウェルビーイングの向上が求められている。しかし、実社会には一筋縄ではいかない課題やそれぞれの立場における強い願いがある。

そのため、対立する考え方に子供たちを出合わせ、「～についての考え方は〇〇だけなのか。」「どちらの立場からみても、納得できるものはあるのか。」「他の解決策はあるのか。」などを検討することで、よりよい社会を創るために主体的に社会に関わろうとする考えが働くであろう。そして、獲得した知識を活用して、「～だから～した方がいいのではないか。」「よりよい社会を築くために～が必要なのではないか。」と選択・判断して実社会を再度捉え直す。繰り返し自分なりの最適解を出し続けた子供たちは、将来、社会の一員としてどのような働きかけができるかを考え、行動することができるであろう。それこそが、社会科の目標である「公民としての資質・能力の基礎」の育成につながるのである。

以上から本研究では、子供の公民としての資質・能力の基礎を育てるために、「社会的事象の見方・考え方」を働かせ、社会的事象を自分事とし、社会を問い直し、何度も社会に関わり続けることができるようにしていきたい。

(3) テーマ設定の理由

①「社会とつながる」とは

社会科の学びの対象は「社会的事象」である。これは、今を生きる子供たちが対峙している実社会だけではなく、人類が長い歴史の中で築き上げてきた社会、さらには、子供たちがこれから直視しなければならない「VUCA な時代」が創り上げる社会も含まれる。

そのような時代の中で求められるものは、自分の生活経験や学習経験、そして社会科の学習を通して身に付けた多面的・多角的に社会的事象を捉える力である。それらを照らし合わせながら学習することで、子供自身が住む地域や日本、世界で起こっていることは、どこで、どのようになど目に見える知識と、人々の願いや営み、工夫など目に見えない知識を身に付け、知識を構造化していく。そして、社会が分かってくる、実社会の課題に直面したりした時、人は社会とつながりを感じ、よりよい社会を創ろうとすることにつながっていくと考える。

②「よりよい社会を創る子供」とは

子供たちは日々の社会科の学習で蓄えてきた知識をすぐに社会に向けて活用するという事は難しい。そのため、子供たちにとって身近な社会的事象や課題が見えるものを提示し、自分と友達、地域に住む人々など多様な考え方に触れる場を設定する。社会を形成する人々は、多種多様で、課題解決のアプローチは一つではないことやすぐには解決できない課題が存在することなどに気付かせるようにする。その中で、人々の願いや思いに触れ、それら多様な価値観を比較・分類したり、検討したりして、「どうにかしたい」「自分だったら」「どうすることがよいのか」といった選択・判断を繰り返し、実社会を問い直し続け、将来のよりよい社会を創り出そうとする素地を育成していきたい。私たちの住む社会は、自然に変化したのではなく、社会づくりに参画した人々によって変化してきたことを子供たちが捉えられるようにし、社会動態の源へのまなざしを育てることで、将来の公民的資質につながると考える。

2. 全体研究テーマとの関連

(1) 社会科の本質の吟味

「学びを創る」が「一人一人の子供が、各教科等の本質的な学びを味わい、自らの学びを価値づけること」としたら、「社会科」における「学びを創る」とは、どのようなことなのか。小学校学習指導要領には、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う」(p17)とある。社会科で子供が創るのは、社会であり、よりよい社会を創るためには、過去・現在の社会を知り、未来は「どんな社会をつくりたいか」といったその子なりの思いが重要である。

そのため、社会科の本質とは、子供たちが「よりよい社会」を考えるための視点だと考える。澤井(2023)は「見方・考え方を意識して授業を行うことで他教科等との違いを明確にした社会科らしい授業を成立させることができる」という。教師が、見方・考え方を意識することで、指導計画に「社会科としてのクレジット(信頼マーク)を付けられる」と捉えることができ、問いや学習活動などが社会科らしい深い学びにつながるであろう。

本研究は、学習指導要領に示されている「見方・考え方」を社会科の本質を考える視点として捉えつつも、更なる視点を付け加えられるか実践を通して検討していく。以下、教科の本質Ⅰ、Ⅱについて述べていく。

①教科の本質Ⅰ(その教科の個別知識・技能を統合・包括する概念)

社会科における教科の本質Ⅰは、子供が「よりよい社会」を考えるために働かせる社会的事象の「見方」である。小学校解説(社会編)では、社会的事象の見方として「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」の3つが示されている。子供が、「よりよい社会」を考えるためには、個別具体的な事例を理解するだけでは、社会の一部を見ることに過ぎない。目に見える事象的な知識を関連付けていくことによって獲得できる、社会的事象の特色・意味・関係性といった、他の社会的事象を捉える際にも生かされる知識を身に付けていくための視点で社会を考えることが大切である。さらに、「よりよい社会」を考える際、人々は誰もが「支える、支えられる関係」にあるはずである。その視点を学習指導要領にある3つの視点を包括できる考えとして取り込めるかどうか実践を通して検討していきたい。

社会科で育てたい概念である「よりよい社会」を考えるための視点として、学習指導要領に示された上記の3つの視点に加え、「支える、支えられる関係」での視点、見方・考え方を主体的に使いこなす態度までも視野に入れていくこととする。以下、社会科の知識・技能を統合・包括する概念の捉え方である。

表1 社会的事象の「見方」

学習指導要領(中教審社会・地理歴史・公民WG資料)に記載されている見方に筆者加筆(視点)	
位置や空間的な広がり の視点	地理的位置、分布、地形、環境、気候、範囲、自然条件、社会的条件、土地利用など
時期や時間の経過 の視点	時代、起源、由来、背景、変化、発展、継承、維持、向上、計画、持続可能性など
事象や人々の相互関係 の視点	工夫、努力、願い、つながり、協力、連携、役割、多様性(価値観)と共生など
「支える、支えられる関係」の視点←自分事として「よりよい社会」を考える際に上記3つの視点を包括	

②教科の本質Ⅱ（その教科ならではの認識・表現の方法）

社会科における教科の本質Ⅱは、社会科の考え方である。学習指導要領解説（社会編）には、社会的事象の考え方として「比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること（方法）」（p18）と考えられている。

1つの社会的事象で働かせた社会的事象の見方・考え方や獲得した知識をもとに他事象についても捉え、社会的事象を比較・分類、総合、関連付けしていき共通の特色を見だしていくことが、実際の社会の仕組みを概念的に捉え、「よりよい社会」を考えることの素地となるであろう。それらを繰り返し行っていくことが重要である。以下、社会科ならではの認識・表現の方法である。

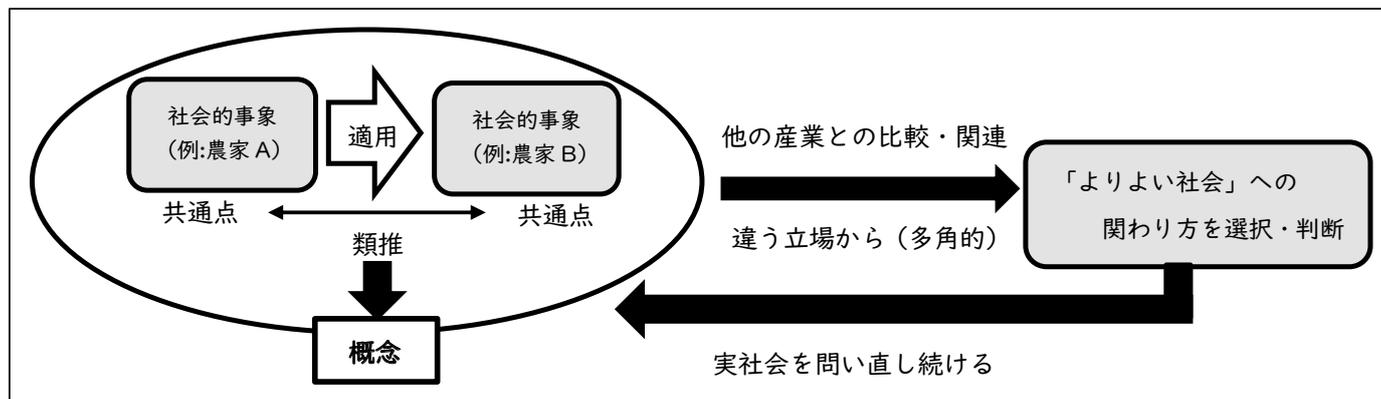


図1 社会的事象の「考え方」（社会科の認識・表現の方法）

(2)一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

①「自分事の学び」の実現に向けた「問い」が生まれる教材の工夫

加藤（2017）は、問いについて、「追究の視点を生かして発見させたい主要な問いであり、学習内容を構成していくもの」として、「見方・考え方」を働かせる学習は、社会の分かり方として、子供が問うことを重視した学習活動だと考えられます。」と述べている。（p43）。また、加藤（2017）は、問いは、「追究の視点を生かして発見させたい主要な問いであり、学習内容を構成していくもの」として、「見方・考え方」を働かせる学習は、社会の分かり方として、子供が問うことを重視した学習活動だと考えられます。」と述べている。（p43）また、子供がもっている問いは、単元の学習展開において学習を自己調整する場面で求められているものだとしている。ここから、多様な問いが一人一人の子供にとって切実な形で成立する＝「自分事として考える」社会科の実現こそが自分事の学びにつながるであろう。また、宇佐美（1973）は、問い（問題）成立について「問題の意識が、矛盾（拮抗、困難、つまずき、ずれ等）に気付くことから始まる」（p142）と述べ、「矛盾というのは、必ず二つ以上のものの間の矛盾であり、何かが何かに対して矛盾しているのである」（p142）とする。

ここから、社会科の授業でも、子供たちが新たに得た情報と自分の既有知識との矛盾や社会における課題に対する考え方が複数ある場面、他者との考えの違いなど、社会的事象との出会いによる子供の感じた「ずれ」を意識させることで、問いが見いだされると考える。そこからスタートする学びこそが「自分事の学び」へとつながる。主体的・対話的で深い学びを実現するためには、問いの成立が不可欠である。そのために、子供が「おかしい」「不思議だ」「変だ」「おもしろそうだ」と思える身近で興味をもつ教材、「すごいな」と感動する教材、多様な問い、切実な問いが生まれる教材、調べて考えていくうちにさらなる問いが見付かる教材を開発していきたい。

②多様な学び方を保障する学習環境のデザイン

宗實（2024）は、「学習の取り組みの前、学習の取り組みの際、学習の取り組みの後の3つの段階に生じる学習サイクルを学習者自身が回すことが自己調整学習であり、自律的に学習を進める姿である」（p125）と述べている。しかし、いきなり自律的に学習を進めることは容易ではないため、社会科がスタートする3年生の段階から、社会科の学習の特徴である問題解決的な学習を進める中で一つひとつ確認し、子供たちが自己調整できる機会を増やしていく必要がある。そのために、「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす（つなぐ）」場面ごとのポイントの一つひとつおさえていく。宗實（2024）は、教師の役割として、一斉授業を行っている時に「いずれは子どもがこの問題解決的な学習のプロセスを進めるという意識を授業者がもつことが重要」（p127）としている。子供たちが一斉指導の中でも、自己調整できる機会として、振り返りを充実させることが重要であろう。学習の中で、自分が学んだ学習内容や学習方法について振り返り、自分の学びを価値付けたり、新たな問題を発見したりすることが、その後の自己調整的な学びへとつながると考える。

学び方を学び、その後は徐々に子供が自己調整できる学習形態を取り入れる。まずは単元の学習問題を基にした計画

にある「調べる」過程について、「個人で考える」か「集団で考える」という形態を子供に委ねる。しかし、必ず個人の「問い」についての予想を考える時間を確保する。子供たちは「つかむ」過程での社会的事象との出会いの中で芽生えた疑問や予想、学級としての学習問題に対する予想など一人ひとりの問いがある。自分の問いや予想を振り返り、その考えをもとに集団で学習した方が自分事の考えになりやすいと考える。教師は、子供に学習形態を委ねるが、活動のサポートに入る中で子供たちが見方・考え方を働かせられるよう問いかけを行い、社会的事象の意味や特色の理解につながるような手だてを講じていく。

3. 研究の重点

(1) 子供が自己の変容を自覚できる学び

学習を通して見いだした自己の学びを自覚できるようにするための評価を工夫した学習を展開していく。本研究では、単元の学習前と学習後の自分の考えの変容を確認する学習活動を設定する。この活動を通して、子供は自分の行動や考えの変容に気づき、さらには新たな学びを見いだすことができた自分に気付くことができると考える。しかし、この段階では、はじめと比べて「変わった」という事実を認識しただけである。教師が子供の成果物等へ「学習を通して見いだしたこと」「学習を通して自身の考えを変容させることができた」などとコメントして評価することによって、子供は新たな学びを見いだしたことについて肯定的に捉えることができるようになる。社会科では、知識を使える知識として習得し、活用、転移させていく姿が求められている。そのためには、そうした知識を自ら活用していこうとする意欲も重要になってくる。自己の学びを肯定的に捉えることで、自分の知識を生かそうと考えることになる。学年、年間の時期、内容と方法を含めて、その学年にふさわしい振り返りの活動を組織していきたい。

(2) 様々な人・教材との出会い

社会とのつながりを子供が実感するには、社会を考えるきっかけとなる教材（人）との出会いが必要となる。そこでは多くの人の願いや努力などが絡み合い、社会が構成されていることに気付く。それらに触れ、考えていくことこそが次代を担う子供たちの社会参画へとつながる。学校での学習を社会に開かれたものとしていくためには、多くの人と繰り返し出会い、対話ができる環境づくりを社会科が担っていくことが必要である。子供たちが将来活用できる公的資質の基礎を養う社会科だからこそ、「何かおかしい」、「このままでいいのか」「自分たちには何ができるのか」「どう関わるのか」の道筋を考えられる能力の育成を目指していきたい。

各学年の学習内容に応じて、身近な人々の問題解決の知恵（工夫・努力・協力）から学ぶことができる人の姿や地域素材の教材化を行い、社会との関わりを身近に感じる手だてを通して、学びを深めていきたい。実社会の問題を自分に落とし込み、また社会へ向けて問い直すなかで、最適解を見いだすこと、その繰り返しを行っていきたい。

4. 成果と課題

(1) 研究の成果

社会科の本質としての「見方・考え方」を子供たちが働かせるためには、意図的・計画的な学習環境をデザインしていく必要がある、見方・考え方をつかませる場面や生かせる場面、振り返りを意識化する場面などを繰り返し行うことが大切であると分かった。また、その場面で教師が「○○（視点）ということを考えて調べると、□□ができるね。」など、見方・考え方を使っている場面を価値付け続けること、獲得した見方・考え方を言語化させる活動（話し合い・記述等の表現活動）の有効性を感じた。

(2) 今後の課題

社会科の本質として、子供が「よりよい社会」を考えるために働かせる社会的事象の「見方・考え方」と設定し、研究を深めたが、各単元における社会的事象の「見方・考え方」を具体的に示すまではできていない。今後、各学年、各単元の実践を通して明らかにしていきたい。また、「よりよい社会を創る子」ということを考えるあまり、発展してきた社会的事象やよい部分のみを捉えさせてしまう教師の在り方が課題である。社会は、多種多様で、課題解決のアプローチは一つではないことやすぐには解決できない課題が存在することなどに気付かせるような単元をデザインしていきたい。

引用参考文献

- ・中央教育審議会（2024）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」
- ・文部科学省（2023）「第4期教育振興基本計画」
- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説社会編」東洋館出版社
- ・澤井陽介・加藤寿朗（2017）『見方・考え方〔社会科編〕』東洋館出版社
- ・澤井陽介、中田正弘、加藤寿朗、宗實直樹（2023）『これからの社会科教育はどうあるべきか』東洋館出版社
- ・宇佐美寛（1973）『思考指導の論理 教育方法における言語主義の批判』（1973）明治図書
- ・宗實直樹（2024）『社会科「個別最適な学び」授業デザイン（理論編）』明治図書

一人一人が問いをもち、実社会を考える続ける授業づくり

—第3学年「小金井市のうつりかわり」を通して—

岩田 裕輝

1. 課題意識

社会科では、学習の問題を追究・解決する活動である問題解決的な学習を通して、公民としての資質・能力の基礎を養うことを目指している。一方で「社会科は暗記教科である」との批判もあり、子供たちに個別的な知識を習得させるだけで終わってしまうことが指摘されてきた。そのため、子供たちが、身近に感じる社会的事象から学習問題を見だし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追求し、追究結果を振り返って、その社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えたりする活動を充実させることが求められている。社会科は問題解決的な学習を繰り返す中で、自分と社会との関わりを深め、社会へのかかわり方を選択・判断したりして表現し、社会への関心を高め、社会科の目標である将来の社会を担う子供の育成へとつなげていく。今回の「市のうつりかわり」の単元においても、子供たちが昔から現在にかけて建物や道具などが変化して「新しくなって便利になっている」「昔は不便だったけど、今は便利になってよかった」など、昔＝不便、今＝便利という捉えではなく、移り変わりから分かるよりよい社会を目指した変化（変わってきた町ではなく、変えられてきた町）や自分たちの生活との関わりを実感できる学習環境を整えていきたい。また、本校における「小金井市のうつりかわり」の単元の課題として挙げられるのは、学校のある小金井市が、子供たちにとって居住している身近な地域ではないということである。これは、3年生の社会科の単元すべてに当てはまることでもある。このような子供たちにとっては、自分たちの住む町とも比較しながら、小金井市との共通点や差異点を見だし、個別の知識を概念的知識（特色、意味や価値）にまで考えを広げられる単元をつくってきたい。

2. 研究テーマとの関連

(1) 社会科の本質に迫る単元づくり

本単元では、市や人々の生活の様子が、時間の経過に伴い、どのように移り変わってきたかを学習する。時代の移り変わりとともに、「よりよい社会」へと移り変わっていくことが実感できる学習を展開していく。教科理論でも述べた通り、社会科における教科の本質Ⅰは、「よりよい社会」を考えるために働かせる社会的事象の見方である。「小金井市のうつりかわり」における見方は「歴史と人々の生活」を学ぶ単元であるため、主に「時期や時間の経過の視点」である。しかし、本単元の見方は「歴史を学ぶ」＝「時期や時間の経過の視点」だけではなく、移り変わりの中には、「よりよい地域社会」を目指し、地域住民の願いと市役所等の行政が共に協力してきたことなど、「事象や人々の相互関係の視点」や「支える、支えられる関係の視点」もある。また、外国人住民の増加や高齢化など、市の現状や課題、様々な思いをもった人々の存在に目を向けるなど、多様な思いや価値観があることを知ったうえで、どのような社会を目指すか考えるなど、多角的な視点から実社会を問い直す必要もあると考える。

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

教科理論でも述べた通り、社会科の学習では社会的事象に関心をもち、問題解決的な学習に主体的に取り組める学習環境をデザインすることが必要である。また、課題意識の中でも挙げた通り、子供たちは「小金井市」に居住していない子も多く、生活圏ではない子も多にいる。こういった環境の中でどのように子供たちに興味関心を抱かせるかが重要になる。本単元では、過去から現在に至るまでに便利になったり、生活が豊かになったりしたことだけを捉えさせるのではなく、現在でもなお残る課題にも目を向け、「技術が発展したり、便利になったけど、課題があるのはどうして?」「昔の人の知恵や考えは今でも生かせるのではないか?」「高齢者や外国人が増えるとまちはどうなるのか?」などの素朴な問いや疑問をもって調べることができるよう教材の提示等を工夫する。それらを通して、過去から学び、よりよい社会を考える子供の育成につなげていきたい。また、子供たちが小金井市のまちで学習したこと

を、自分の住む市区町村と比較するなどして、個別の知識を統合し、社会的事象を概念化できるような手立てを考え
た。前単元の消防から警察への学習のつながりについては、子供たちは、「消防署の時と同じように、警察もすぐに
駆け付けられるように準備（備え）をしているのかな？」「消防の学習の119番通報のように私たちが警察を呼ぶと
きには、通信指令室でいろいろな人が連携・協力しているのかな？」「消防団があるから、同じように地域にも警察団？
みたいな組織が地域を守っているのかな？」と問いをもち学習に取り組んでいた。

本単元でも、調べたことから、未来の小金井市がどうあるべきかを考え、同じように自分の住む市区町村につい
ても同じような見方・考え方で未来への展望を考えていく。そこには、それぞれの市の課題や3年生第1単元「小金
井市の様子」についての学習とのつながりなど、これまでの学習で身に付けた見方・考え方をもとに、「問い」をも
って調べを進めるようにしていきたい。常に「問い」を意識することで、自分の学びの道筋を見通すことへとつな
がるであらう。

3. 実践の実際

(1) 単元の見通し

【知識及び技能】

- ①交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、聞き取り調査をしたり地図な
どの資料で調べたりして、必要な情報を集め、読み取り、市や人々の生活の様子を理解している。
- ②調べたことを年表や文などにまとめ、市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたことを理
解している。

【思考力、判断力、表現力等】

- ①交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、問いを見出し、市や人々の生
活の様子について考え、表現している。
- ②駅や鉄道、公共施設ができたこと、人口が変化したこと、土地利用の様子や生活の道具が変わってきたことなど
を相互に関連付けたり、市の様子の変化と生活の様子の変化を結び付けたりして、市や人々の生活の様子の変
化を考え、適切に表現している。

【学びに向かう力、人間性等】

- ①市の様子の移り変わりについて、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を
追究し、解決しようとしている。
- ②学習してきたことを基に、地域社会の一員として、小金井市のみならず自分の市の発展について考えよう
としている。

(2) 学習の流れ（全17時間）

第1次（つかむ）（3時間）	生活の道具や駅周辺の様子の変化から、単元の学習問題を考え、学習計画を立て るなかで単元の見通しをもつ。
第2次（調べる）（7時間）	単元の学習問題と自分の問いについて追及する。 （人口、交通、土地の使われ方、公共施設、生活の道具） 江戸東京たても園への見学。
第3次（まとめる）（2時間）	単元の学習問題に対する自分の考えをまとめる。
第4次（いかす）（4時間）	未来のより良い小金井市のまちづくりのためにできることを考える。

(3) 分析

第1次 学習問題を立て、学習の見通しをもつ

本単元では、子供自身が自己の変容を捉えるように、単元の前後で同じ問い「小金井市はどのようなまちだろうか」
を問うた。「小金井市」ということが出てくる第2時に行ったが、人の願いや思いのうえに市が成り立っているという

記述がなかったので、この単元の学習を通した変容を期待した。これまでの販売の単元、農家の単元、警察・消防の安全の単元でも人が出てきて、それぞれの願いや努力に焦点を当ててきた。同じように本単元でも人の思いや願いを教材化した。

そして学習問題を作るために、駅の移り変わりの写真の中に、バスや車、道路、高架化など「交通」に関わるもの建物や店など「土地の使われ方」に関わるもの、信号機や点字ブロックなどこれまでの人々の安全を守る人々の仕事に関わるものについての気づきが生まれる手だてをとった。ある子どもが急に黒板に「洗濯板とたらいの時代」と書き出した。何人かが集まり、黒板の前で会話が生まれ、板書も始まった。特に指示は出さなかったが、書かれていることから移りかわりの理由を考えたり、自分なりの予想を考えたりする様子が見られた。黒板も解放することで、自ら学ぶことや学び方の広がりが見えた瞬間であった。



写真1 「子供たちが黒板を活用する」第2時の板書
第2次 一人一人が問いをもって行う自由進度学習

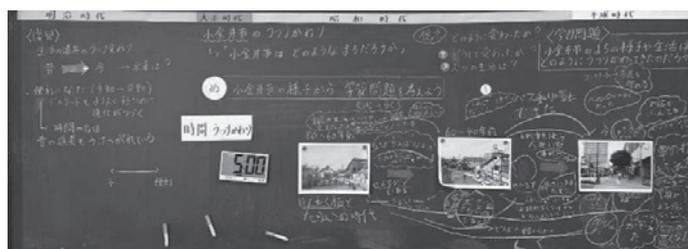


写真2 「学習問題作り」第2時の板書

学習計画をもとに、一人一人が問いをもち「人口」「交通」「公共施設」「土地の使われ方」について調べていった。「人口」については、一斉指導を行い、それ以降は自由進度学習を取り入れた。学習への意欲は高く、それぞれが学習を進めることができていたが、問いについては、自分事ではない子がいた。学習計画で確認した調べる項目をただ問いの形にしているだけであるなど、「本当にもっと知りたい」「考えたい」という問いができておらず、与えられたものだけをこなしている子が少なからずいる状況であった。問いの質を考える必要がある。また、インターネットを使って調べることにより、多くの情報を瞬時にたくさん得ることができており、調べる幅が広がった。一方、教師側の想定を超えた問いに対しての資料を用意できなかつたり、見取りが不十分になってしまつたりすることもある。単元の学習問題と自分の問いとのつながりを意識したインターネット検索など、児童の情報活用能力も育てていく必要があると考える。

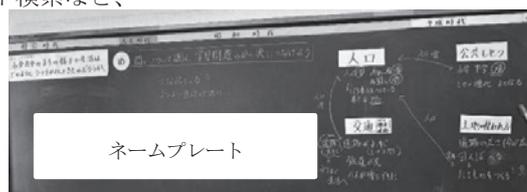


写真3 自由進度学習の板書

第3次 調べたことを関係図にまとめる

学習したことをまとめる際には、この単元で一般的な年表ではなく、一人一人がそれぞれの移り変わりによって発展してきたことや新たな課題をあげ、生かす場面につながる手だてをとった。調べる過程で活用したまとめの図を参考に、関係図をまとめた。関係図によってそれぞれの移り変わりのつながりが明らかになった。

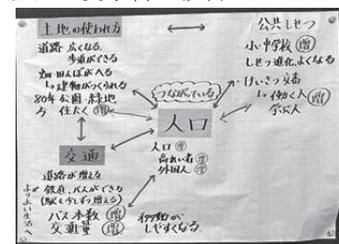


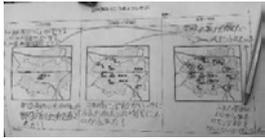
写真4 調べたことをまとめた関係図

第4次 小金井市の未来のまちづくりを考える

学習したことを生かし、小金井市のこれからのまちづくりについて考えた。それぞれが調べた学習をもとに、移り変わりによって発展してきたことだけではなく、課題について取り上げ、それらを改善するためにできることを考えた。未来のまちを絵やタブレット端末を活用してまとめ、発表をした。課題については、今すぐに私たちができるこ

とや自分たちが大人になったらできることなど、実現可能性を吟味することで、より提案性のあるものとなった。

(4) 評価

児童	学習前	学習後
Iさん	<p>単元のはじめの「小金井市はどのような町であるか」という問いに対して、「小金井市はいなかだと思った。理由は畑がいっぱいあり、ビルもないから」と記述。</p>  <p>写真5 自由進度学習ワークシート</p>	<p>単元のはじめは小金井市の様子など事実だけに着目していた。しかし、単元の学習過程「調べる」段階では、交通の移り変わりを調べると見通しもち、市民の願いに市役所の人が応えた開発がされた、開発によるメリットやデメリットなど、多面的・多角的な視点から社会的事象を捉えることができてきた。</p>
IIさん	<p>単元のはじめの「小金井市はどのような町であるか」という問いに対して、「自然いっぱいな公園がある」と記述。</p>  <p>写真6 単元表（自由進度学習）</p>	<p>単元のはじめは「公園がある」という小金井市民ならではの事実認識があった。しかし、単元の学習過程「調べる」段階では、「人口が増えたことによって駅やバスもふえたし、学校もたくさん作られて、交通もあんぜんになって、住宅もふえて、全部つながっている。」と、1つの点として社会的事象を捉えていたところから、事象間のつながりをもった捉え方ができるようになってきた。自分で問いを見つけ、予想を立てることや、家庭学習でノートに調べ学習を行ってきて教師に提示するなど、教室での学びを越えた学びが生まれてきている。</p>

4. まとめ

本単元では、自分自身が立てた問いとそれらを解決する中で「よりよい社会」を考えることを中心的な問題として扱った。子供たちが調べを進めていく中で、私たちの学校のある小金井市は、「自然的に変わってきたまち」ではなく、「人々の営みによって変えられてきたまち」という見方をもつことができた。「よりよい社会を創る子」というテーマを基に、大人だけではなく、未来の自分たちも社会を創っていく主体となるという意識が芽生えたことは成果である。さらに、自分の問いを追究する時間を多く確保し、学び方も子供たちに委ねることで、子供の学びが活性化され、一人一人の思いや願いを実現する学び方となった。しかし、そこには課題も残された。問いの質が子供たちに浸透していないことや情報を収集するツールが教師の提示した教材やインターネットであるなど、人との出会いがなく、事実のみを捉えるのみにとどまってしまうなど、子供たちが問いをたてるための手立てが不十分であった。社会科は、社会的事象との出会いをもとに表出する疑問や経験とのずれから生じる問いが重要となっていくため、子供たちがなぜそのような問いをもったのかという、子供の問いの根源を見取っていくことが重要になっていく。さらに、社会的事象の見方・考え方が働いているかは、問いの形で表れてくる。今後は、子供たちが社会的事象に出合った際、なぜそのような問いをたてたのか、また、問いがどのように変遷していくのかについて、社会的事象の見方・考え方を繰り返し働かせる学習過程の中で見取っていききたい。

また、自由進度学習を行い、一人一人の学びを重視することはよいが、やはり全体で整理したり、板書で分かったことをまとめたりする必要がある。自由に調べ、まとめるだけでは、問いの質や学習形態を自分でデザインできない段階では、学習の広がりはあるが、深まりがない。学びをつなげる教師の声掛けや児童同士の協働的な学びの指導が必要である。社会科において、どの単元のどの学習過程で個別最適な学びを取り入れるか、一斉指導を取り入れるかなど、単元のデザインを今後、考えていきたい。